

1)

担当：星野 潮

題：プロトンポンプ阻害薬は糖尿病の進行に関与するか

結論：PPI の関与は他の観察研究から明らかとなり、潜在的なメカニズムが示唆された

原題：

Ciardullo S et al.

Prolonged use of proton pump inhibitors and risk of type 2 diabetes: Results from a large population-based nested case-control study.

J Clin Endocrinol Metab 2022 Jun 16; 107:e2671

本文：

最近の観察研究で、プロトンポンプ阻害薬（PPI）の長期使用が糖尿病の進行に関与することがわかった。（NEJM JW Gastroenterol Nov 2020 and Gut 2021;70:1070）今回、イタリアのナショナルヘルスサービスのデータベースからも同様の問題が示された。

5年間で糖尿病が進行した50000人の成人（50歳以上）と糖尿病のない50000人を、年齢、性別、詳細な臨床状態をマッチングさせて比較した。多変量解析を用いた分析で、PPIの内服と新規糖尿病発症の有意な関連性が示された。PPIの内服2～6ヶ月、6～24ヶ月、24ヶ月以上で、糖尿病発症のリスクはそれぞれ1.2、1.4、1.6倍となった。

コメント：

PPIの使用で糖尿病が別のステージに進行するが、その原因、影響は証明されていない。ただ、PPIと糖尿病への悪影響との関連の可能性は多く示されてはいる。

今回の研究で直接示されていない交絡因子の例として肥満がある；体重超過は糖尿病の進行と胃食道逆流（PPI 治療につながる）の両者に関係する。それにもかかわらず、今回の結果が無視できないのは因果関係の可能性が示された事である。慢性的な酸抑制は腸管の微生物群を変化させ、この微生物群の変化が異常な糖代謝に関与する。これらの結果から、PPI 内服中の前糖尿病患者に対し、やむを得ない場合を除いて PPI 処方中止することは妥当と考えられる。

2)

担当：伊藤 健一

題：合併症のない虫垂炎に対する抗生物質療法：臨床試験からのさらなるデータ

結論：患者が手術の代わりに抗生物質で治療された場合、24 時間以内の退院は安全であると思われた

原題：Talan DA et al. Analysis of outcomes associated with outpatient management of nonoperatively treated patients with appendicitis.

JAMA Net Open 2022 Jul 1; 5: e2220039

本文：

米国の虫垂炎患者を対象とした無作為化 CODA 試験では、30 日目の QOL スコアで見ると抗生物質は虫垂切除術との比較で非劣性が示された。もっとも最初に抗生物質で治療された患者の 30 日間の虫垂切除率は約 16% であったが (NEJM JW Gen Med 2020 年 12 月 1 日および N Engl J Med 2020; 383:1907)。抗生物質グループの場合、プロトコールの規定は、最初に静脈内抗生物質を投与した後、さまざまな経口レジメン (合計 10 日間) で投与するもので、患者が臨床的に安定していると思われる場合は 24 時間以内に救急部門または病院から退院を許可していた。この二次分析では、研究者は早期退院の安全性を調べている。

その結果、抗生物質を投与された 726 人の患者のうち、24 時間以内に退院した患者と 24 時間後に退院した患者との間に、ベースラインの人口統計上または臨床上の重要な違いがないことがわかった。7 日間の重篤な有害事象 (すなわち、死亡、生命を脅かす事象、実

質的な障害または不能、または虫垂炎に関連しない入院)の発生率は、両群で患者 100 人あたり約 1 人であった。 2 つのグループの 30 日間の虫垂切除率は、それぞれ 13% と 19% であった。

コメント：

早期退院群と後期退院群の間に重要なベースラインの違いは見られなかったが、24 時間以内の退院に関する臨床医の判断に影響を与える、捉えにくい重要な違いが確実に存在していた。これらの違いとは、25 の研究施設における早期退院決定のばらつき（範囲、0% から 90%）である。退院に関する決定を下す際の主な問題点は、患者の安定性の判断と早期フォローアップが可能かどうかにあった。 -トーマス L. シュウェンク医学博士